

# Die Eiche

ディ アイヘ

<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche  
Gesellschaft der Präfektur  
Chiba

〒270-2214松戸市松飛台556-12  
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdg-chiba.com



協会Home Page

## 2022年ドイツ軍人慰霊祭

-3年ぶりに在日ドイツ大使を迎えて開催-

サッカーワールドカップカタール大会にて、日本とドイツが対戦する日もなった11月23日、第28回ドイツ軍人慰霊祭が当協会の主催により、ドイツ本国からのデレゲーションを含め外部から多数の来賓をお招き、多数の会員も参加、午前11時より船橋市営習志野霊園で営まれました。

当日は、近年にはない雨が降りしきる悪天候ではありましたが、植松事務局長の開会の辞に続いた厳粛な黙とう、ドイツ・デレゲーションも絶賛した津田沼高等学校オーケストラ部が、前日にCD録音した演奏によるドイツ国歌の斉唱。来賓用テントも設営し、例年以上に意義深い慰霊祭および直会を開催することができました。



雨天の中で行われた慰霊祭

来賓として、ドイツ関係では、Dr.クレメンス・フォン・ゲッツェ駐日大使や大使館武官室のカルステン・キーゼヴェッター大佐等ドイツ大使館よりの出席に加え、ドイツ本国よりドイツ衛生軍総監ウルリッヒ・バウムゲルトナー中将等総勢11名の皆様に参列いただきました。さらに地元関係機関より、自衛隊第一空挺団新井直樹広報班長、千葉県総合企画部国際課木村洋志課長、船橋市杉田修副市長、習志野市諏訪晴信副市長の来賓も迎え、会員32名および非会員、報道関係者を含め、約60名の参列者となりました。



フォン・ゲッツェ駐日大使と来賓の方々



慰霊碑に手向けられた献花

金谷会長の追悼・慰霊の辞において、来賓および参列者への謝辞に続き、「100年前の第一次世界大戦時、俘虜となり習志野に収容されたドイツ兵達の毅然たる生活態度と秩序に感心し、国際政治上の対立にも拘わらず、収容所周辺に住む私たち日本人は、ドイツ人およびその文化を愛するようになり、交流を深めることになりました。そのような状況下、当時のスペイン風邪のために、不幸にも約30名の方がここ習志野の地で亡くなりました。私達は、この方々のご冥福を祈り、全世界に一日も早く平和が訪れることを心より願いつつ、ここ墓標の前にたっているのです」と挨拶。

フォン・ゲッツェ駐日大使は、慰霊祭の開催および墓地の手入れ・

管理に対する当協会、関係機関および地元の方々への謝辞を述べ、「私達がここで追悼する兵士はすべて、最近の歴史の戦争で犠牲となった人々を代表する象徴なのです。過去の悲惨な戦争を思い起こすことで、私達全員が平和への責任を分かち合えるのです。ロシアのウクライナに対する残虐な戦争や、太平洋地域の緊張の高まりから、平和は当たり前のもではなく、日々努力しなければならないことがわかります。そのため、日独のような友好国が、自由と平和という共通の価値を守り、その維持のため一貫して立ちあがることが重要です。私たちが共にこの追悼行事を行うことは、日独両国と両国民を結びつける深い友情の表れである。」と強調されました。

その後、千葉県、船橋市、習志野市の各代表者からのご挨拶の後、御霊の紹介を当協会会員の海上自衛隊の本名龍児1等海佐が、墓下に眠るドイツ兵士30名全員の名前と死亡時の階級を読み上げました。最後に、フォン・ゲッツェ駐日大使およびドイツ衛生軍総監バウムゲルトナー中将による大花輪の捧呈があり、続いて参列者全員で慰霊碑の前に白菊をささげ、30名の冥福を祈りました。その間流れた習志野高校オーケストラ部が演奏のBGM「閉じておくれ僕の瞳を」および「カヴァレリア・ルスティカーナ間奏曲」はその場の雰囲気心地よく漂わせておりました。

引き続き、陸上自衛隊第一空挺団の建物で行われた直会には、ドイツから来日されたドイツ衛生軍総監バウムゲルトナー中将一行が参加され、1860年代より始まった日独医学交流について、「森鷗外」や「北里柴三郎」の名前も出し、述べられた他、本名龍児1佐がプレゼンした「1818-19インフルエンザ・パンデミックと習志野俘虜収容所」も医学者の1人として興味深く聞かせてもらった、とのコメントもありました。

今回の日独協調による慰霊祭は、複数の新聞に記事掲載されるなど、話題性のある式典となりました。

(理事：坂田 博)



バウムゲルトナー中将のご挨拶



本名龍児1佐の講演



直会参加の皆さん

## ドイツ連邦共和国大統領夫妻との 懇談会に出席して 竹内 優 理事

11月2日（水）、日独協会の福岡常務理事と日独協会連合会のDr. ユリア・ミュンヒ理事からの推薦により、代官山 T-SITEにて開催されたドイツのフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー大統領とエルケ・ビューデンベンダー大統領夫人との座談会に参加してきました。「ボランティア活動」がテーマの本座談会にはボランティアに従事する日本・ドイツの若者5名が参加し、和やかな雰囲気のもとでディスカッションが行われました。私は主に当協会での経験を基に、日独交流の観点からお話しさせていただきました。



発言中の竹内理事



懇談会出席者メンバー

ドイツメディアによるドイツ語でのインタビューのあと、ドイツ日本研究所のフランク・ヴァルデンベルガー所長の司会により、1時間におよぶディスカッションが英語で行われました。私たち登壇者は各自のボランティア活動の内容を紹介し、日独のボランティア活動の違い・共通点、社会におけるボランティア活動、今後の日独の政治において期待することなど、様々な質問に答えました。最初は非常に緊張しましたが、大統領ご夫妻が笑顔で興味深そうに私たちの話を聞いて下さったので、その後はリラックスして参加できました。ディスカッションの最後には、2024年夏にベルリンで開催予定の日独国際会議に触れ、日独若者交流の重要性を訴えることが出来たのが個人的に大きな収穫でした。この貴重な経験を糧に、今後も様々な角度から日独交流に従事していきたいと思えます。（撮影：山本久瑠実会員）

## 青壮年部-ブランデンブルク探検隊 講演実施報告

10月30日（日）青壮年部-ドイツ地誌研究Gr.主催でオンライン講習会を実施しました。尚、本講演は、ドイツ大使館文化事業助成プログラム対象の講演会となります。

この講演会を開催に際して、当協会におけるドイツ地誌研究Gr.の活動の項目の一つに位置付けられています。この活動として、ドイツの街をドイツ在住経験者が本会報誌に定期的に「ドイツの街紹介」を行っています。また、今後、新たにドイツの街を地誌研究会の中で決めてドイツの地誌に対する知見を高める動きを計画しています。

上記活動の延長上にドイツの各都市の研究には、歴史文化的な背景を抜きにした活動はできないと思っております。今回、ベルリンの街をフォーカスしますが、その文化的な背景を長年ドイツ在住経験をお持ちの久保田由希さんとチカ キーツマンさんをお招きして「構造物をリノベーションして使い続けるドイツ文化」というタイトルでご講演を

お願いしました。建物を別の目的の建物として使い続けるという視点で兵舎を住居、公民施設として活用、教会が水族館として活用される事例など視覚的に多くの事例をして説明くださいました。ドイツ文化のドライなポイントとして、火葬場などの建築物が住居に活用される点なども紹介、ドイツでは「事故物件」ということは聞かないなど合理主義的な点も触れられました。協会内外から総勢45名が参加、活発な質疑応答がなされました。講演後、参加者からの感想を頂戴しました。古いものを大切に使うドイツ国民性への賛同、住宅事情を豊富な事例でよく理解できたという声、豊富な現地での生活経験に基づく講演にひきこまれた、リノベーションの対象が歴史文化財だけでなく、一般の家屋、公共施設までに及んでいることへの驚き、環境問題の観点からも共感できた、リノベーション文化の背景にあるリサイクル大国としてのドイツ、自分でリノベーションすることを可能にする働き方、時間のゆとりに対する日独間の相違、講演の説得力は、日独文化研究の入口になるのではなど多くのコメントが寄せられました。背景にある文化とともにドイツ地誌研究を続けたいと思いました。

（常任理事・青壮年部長 勝見 浩明）



## （公財）日独協会主催

### 「懇談会サロン」

-大野 巨児 理事より最新大学事情語られる-

（公財）日独協会が主催する会員懇談会サロンが10月16日（日）18時からオンライン式で開催され、当協会の大野理事が「ライブツィヒの学生生活：現地からの報告」のテーマで、インタビュアー（本間）の質問に答える形でドイツから講演されました。大野理事は昨年からライブツィヒ大学に留学し、ドイツ語教授法（「外国語としてのドイツ語」）を専攻されています。

講演の中で、ライブツィヒ大学はドイツでは二番目に古く、メルケル前首相や森鷗外他名だたる著名人が学んだ大学で、現在では153か国の諸外国出身留学生が学んでいることが紹介されました。また、ドイツの大学を選択し留学に至った経緯、日独の大学の違い、コロナ禍の中、ドイツの学生生活の様子、学生生活で感じるロシアのウクライナ侵攻の影響、日常生活では日本と同様、様々な日用品が高騰していること等々、終始和やかな雰囲気の中、情報豊富な資料を使用されながら、ドイツの現状についてわかりやすくお話しされました。

日本とドイツの大学・学生生活の違い

…たくさんあります！

- 学費がかからない ※BW州は除く(EU圏外出身の学生の場合)
- 授業における積極的な発言
- “知識の獲得”にとどまらない“知識の応用”の重視
- インターンシップ(Praktikum)の重要性
- 学生の大学自治に対する意識(Fachschaftsratなどの存在)
- 自由な(=時間に追われない?)学生生活設計

講演中の大野理事と講演内容（PC画面より転用）

インタビューに続き、質疑応答の時間では、協会関係者をはじめとする多くの参加者から様々な質問や意見が活発に飛び交い、終了予定時間も延長されるほど、大変有意義な交流の場となりました。

2 （常任理事：本間 実里）

## 青壮年部

# ドイツ語・ドイツ文学研究会報告

## ウィーンと教師教育

この夏2年半ぶりにヨーロッパへ出かけました。コロナ前は年に4、5回は訪れていたのに、待ちに待った旅で、しっかりパワーを充電してきました。今回の一番の目的は、ウィーンで開かれる、4年に1度の国際ドイツ語教師連盟の国際大会（Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer, 略してIDT）に参加することでした。もともとは2020年の予定でしたが、2年遅れとなり、会場には世界中から約3000人が集まって、再会を喜び合う姿があちこちで見られました。日本からも多くのドイツ語教育関係者が参加し、研究発表やワークショップ、交流活動に加わっていました。私自身は、今回一般参加者として気楽に見て回ったので、なかなか楽しかったです。



ウィーン大学構内



シュテファン大聖堂

日本におけるドイツ語教育は、学習者の大半が大学生以上なので、中等教育から外国語を学ぶことの多い他国と比較すると、少し事情が特殊です。そのような理由で、日本のドイツ語教師はほとんどが大学の教員なのですが、大学の教員になるには、修士号は必要であるものの、教員免許はいりません。研究で忙しく、教育について考える余裕はないという人も多く、それが伝統的な文法翻訳型授業がなかなか変わらない要因ともなっています。

グローバル化が進んだ現代では、海外に出ているいろいろな人とコミュニケーションをとる機会も多くなり、それに伴って外国語の学び方も変えた方がよいと誰もがわかっているのですが、そういった事情で変化はなかなか進みません。



久々の現地におけるビール

現在私は、そういった教師の援助をするための研究をしています。再研修講座や教育研究ワークショップなどを実施し、ドイツ語を学ぶ目的は何かをもう一度考えてもらったり、辞書や文法書だけでなく、プロジェクト型の教材も見せながら、いろいろな学び方があることを理解してもらいます。教え方を迷っている人に自信を持ってもらうことも重要な目的です。

このように教師教育は、未来のドイツ語学習者育成につながっていくという意味でも、とても有意義な研究テーマだと考えています。次回のIDTは2025年に北ドイツのリューベックで開催される予定です。そこで再びいろいろな人と交流できるのを、今から楽しみにしています。

（理事：草本 晶）

## 新入会員紹介（山本 久瑠美）

こんにちは。皆様、初めまして。今年7月に入会させていただきました、山本久瑠美と申します。

昨年4月から現在まで、県内習志野市の職員として働いております。学部時代にドイツに留学し、卒論及び修論の研究題目として中世ドイツの大司教座を取り上げたことがきっかけで、ドイツと聞くと反応する身体になった者です。



出身は東京ですが、学部時代に県内の大学に通っており、通学路として経由していたJR津田沼駅周辺の雰囲気がいっぱい〜と習志野市役所を受験しました。習志野俘虜収容所の存在を知ったときは、驚くと同時にテンションが猛烈に上がったことを記憶しています（高揚した気持ちのまま夜中にドイツ俘虜オーケストラの碑を見に走り、その佇まいの謙虚さに再び驚きを覚えました）。

本協会に入会させていただいてから、会員の皆様の精力的な活動と人柄の温かさ、参加させていただくイベントが貴重な機会であることなど、早くも感銘を受けております。今後とも何卒よろしく願い申し上げます。

## 習志野ドイツフェア&グルメフェスタ 活動報告

新型コロナウイルスの影響により2019年を最後に見送ってきた「習志野ドイツフェア&グルメフェスタ」が10月22日（土）・23日（日）の2日間、JR津田沼駅南口モリシア前広場にて盛大に開催されました。3年ぶりの開催とあって、会場は大変多くの来場者で賑わっていました。



会長によるオープニングスピーチ

初日のオープニングセレモニーでは当協会の金谷会長が特設ステージで挨拶をされ、第一次世界大戦時に遡る習志野市とドイツの関係および当協会について紹介しました。千葉県日独協会のブースはモリシア2階に設置され、ドイツ軍人慰霊祭や青壮年部企画イベント、ドイツ語講習会等、当協会が行う多種多様な活動、当協会が所蔵する習志野俘虜収容所内の写真等を紹介するパネル展示を行いました。ブースには習志野市の宮本市長はじめ、ドイツや当協会の活動、習志野とドイツの関係等、様々な興味を持った方々に立ち寄っていただきました。ブースに足を運んでいただいた方々の熱心に展示を見て廻る姿や会員の説明に耳を傾けられる様子が印象的でした。



当協会の展示ブースの様子

## いちかわドイツデー活動報告

11月3日(祝日)にニッケコルトンプラザにて「いちかわドイツデー2022」が開催されました。

このイベントは市川市とローゼンハイム市(バイエルン州)のパートナーシティ交流の一環として毎年開催されるものであり、市川市からの要請を受けて当協会は後援団体としてパネル展示に参加しました。

今年も新型コロナウイルス対策として、例年より規模を縮小して開催されたものの、祝日であった当日は多くの人々で賑わいました。

吉川常任理事により整備作成された当協会パネルと植松事務局長作成のパンフレット等のスタンドは「ワークショップ・交流紹介エリア」の一角に設置され注目を集めました。多くの見学者から、当協会に対する質問や入会方法等の熱心な問い合わせがあり、チラシ、Die Eiche等も持ち帰っていただきました。

「ドイツの食・文化エリア」ではドイツビール、ソーセージ、パンなどは販売されたものの、コロナ対策の為に飲食スペースはなく、持ち帰りのみの形式となりました。

来年こそは、従来通りの屋外テントブースで展示及び協会の紹介活動等が出来るようになることを願っています。

(常任理事：志賀 久徳)



当協会の展示ブースの様子

が少ない中において有意義な催しとなりました。

(演奏者のコメント：通常のピアノより低音が4鍵多い珍しいモデルのため、大きくて威厳のある楽器でした。明るく豊かな音色と低音の深い響きが印象的でした。音の変化が驚くほど滑らかで打鍵の反応もよく、演奏者にとっても素晴らしい楽器でした。)



演奏会に参加したメンバー

(常任理事：志賀 久徳)

## 書籍/Buch

10月30日にオンラインで講演頂いた「ブランデンブルク探検隊」のお二人、久保田由希さんとチカ・キーツマンさんによる新刊「ドイツの家と町並み図鑑」(エクスナレッジ ¥1,800+税)が発売されました。



どのページを開いても魅力的な建物の写真がぎっしりと詰まっています。レンガ造りの趣のある民家、石を積みあげた家はごつごつしているけれどとても愛らしい。シンプルな見た目の団地、色々な形をした木組みの住居や不思議な形をした集合住宅等々。お二人はドイツ各地を訪れ、時にはドローンを駆使し、無数の写真を撮影されたそうです。その中から厳選されたものが本に収められました。写真を眺めているだけでもわくわくします。またそれぞれ歴史的背景や建築方法、家の素材についても説明があり、その解説にも自然と引き込まれていきます。

「家」について調べると、おのずと見えてくるその土地の風土や世の移り変わり。この「図鑑」を片手にドイツの町歩きがたくなります。ドイツのさらなる魅力に出会える一冊です。

(常任理事 本橋緑)

## バーゼンドルファーを聴く会に参加して 演奏者 土屋 有里 常任理事

当協会の土屋常任理事が、市川市役所第1庁舎2階の市民活動支援スペースに設置されている、世界3大ピアノのひとつと呼ばれる名器のバーゼンドルファーを、参加者の心に残る素晴らしい音色で演奏しました。



演奏を聴く人々

曲目は、モーツァルト作曲「フランスの歌「ああ、お母さん聞いて」」による12の変奏曲「(きらきら星変奏曲)と、シューマン作曲リスト編曲「献呈」(シューマンの歌曲集<ミルテの花>第1曲「献呈」)のリストによるピアノ編曲版)が演奏され、オープンスペースの会場には音楽の都ウィーンで育まれたまるやかで豊かな音色が響き渡りました。



演奏中の土屋理事

開催日の10月28日には、金谷会長及び木戸副会長夫妻の他、多くの会員の皆様と一般の訪問者も交えて、参加者は本物のピアノ演奏を聴くことができました。

この企画の発案は桑原会員から出されたもので、コロナ禍でイベント

## 今後の予定

■「境界地域 Borderland」としてのエルガス=ロートリンゲン  
～文化・言語・住民の移り変わり～  
日時：12月18日 18:00-19:30 ZOOM形式  
講師：会員 衣笠講師(神戸大学大学院)

■新春講演会  
日時：2023年2月25日 15:00-17:00  
講師：Dr. Klaus Vietze ドイツ大使館首席公使  
場所：麗澤大学  
●詳細は、別途、ご案内致します。

## 会員情報

新人会員 小林 多美子 浦安市  
森田 耕平 船橋市  
法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、  
(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事

## 編集後記

2022年度としての活動は、まだ終わっていませんが、今年の活動を振り返ってみると、感染予防の観点から引き続き、オンライン中心の協会活動となったかと思えます。そのような状況下、協会活動としては、本号の記事でも示されているとおり、ドイツ軍人慰霊祭を活動をはじめとして、講演会、懇談会の実施、参加、他の地区の日独協会との交流、日独文化交流協会主催のイベントとの交流、日本語シュタムティッシュの開催による独語母語者との交流など積極的な対外活動が顕著であったかと思えます。この活動の勢いを来年度の活動にも継続したいと思えます。(勝原 浩明)